

和歌山県大会最優秀賞（和歌山地方法務局長賞）

曾祖母との関わりから見えてきたこと

和歌山県立古佐田丘中学校 一年 俵 和花

「和花だよ。ばあば」

耳元で大きな声でゆっくりと話しかけると曾祖母はいつも「のどかちゃんっていうの？いくつ？」とやさしく聞いてきます。

私の曾祖母は、認知症という病気でした。その病気のせいで、すぐに私の事が分からなくなり、いつも自己紹介から曾祖母と私との会話が始まるのです。

しかし、病気になる前の曾祖母は、私の顔を見るなり「和花ちゃん、よく来てくれたね。」と声をかけ抱きしめてくれていました。曾祖母に絵本を読んでもらったり、お手玉を教わってもらった思い出が今も私の心の中でしっかり記憶されています。曾祖母と過ごす時間は友達や両親と過ごす時間とは、また異なり、とてもゆっくりとした時間が流れ温かい気持ちになれました。

そんな大好きな曾祖母が認知症という病気になり、しだいに私の事も曾祖母の記憶から消えるようになると今までのように同じ時間を一緒に楽しむ事ができなくなり、私の中でどこか曾祖母に対する心の距離ができてしまっていました。

私の事はよく「みっちゃん」と間違えました。「みっちゃん」とは母によると曾祖母の妹で戦時中に栄養失調で亡くなったそうです。曾祖母は「みっちゃん」と私に呼びかけては引き出しから、食べかけのお菓子を出して私に手渡してきました。私は「ありがとう」とお礼は伝えるものの、その後、どうすればいいのか。曾祖母の行動に、ただ、とまどっていました。

父の事も曾祖母の記憶の中から消え、色々な人に変身しました。私の記憶の中で一番印象深く残っているのは、曾祖母が父の事を自分の弟だと思い込んだ時の事です。曾祖母の弟は戦死しているのですが、曾祖母は父を見るなり、「よう無事で帰ってこられた」と父の手をしっかり握って泣き出したのです。しかし父は、笑顔で「長い間待たせてすみません。無事帰ってまいりました」と答えていました。すると曾祖母は、とてもうれしそうな顔になり、弟がいない間の戦争中の大変だった生活を何度もくり返し父に話していました。

その時の私には、父の行動が理解できず、不思議な世界にいるかのように父と曾祖母との会話を聞いていました。

それから間もなく曾祖母は亡くなったのですが、亡くなって曾祖母と過ごした日々を振り返ると「曾祖母に私がしてあげられる事はなかったのか」心の距離がうめられないままのお別れになってしまった事に後悔が残りました。

そんな時、出会ったのが「忘れても好きだよ。おばあちゃん」という本でした。この本は認知症であるおばあちゃんと孫との関わりが描かれていました。また、おばあちゃんの人生を大きな一本の木に例え、上の葉を最近の出来事、下の葉を昔の思い出。上の葉から順に散っていくというお話は認知症という病気の事がよく分かり、私の頭の中にずっと入ってきました。

曾祖母が私や父の事は記憶からすぐに消えるのに戦争の時の事はよく覚えていた事も、父が曾祖母の弟になり切った行動をとっていた事も、今の私には理解できます。しかし、私は曾祖母の気持ちに寄り添った関わりができていたのか。という疑問がわきました。それが曾祖母に対する心の距離だったのではないか。病気がしだいに進行していく中で不安や孤独を感じていたのかもしれない。もっと曾祖母の気持ちに寄り添う事ができていたなら、最後まで曾祖母との時間を楽しむ事ができたかもしれないと思いました。

今、高齢化が進み、認知症という病気は特別な病気ではなくなってきています。

しかし認知症という病気を正しく理解している人は少ないと思います。

先日も学生の集団が歩いていた時、「認知症やん」と友達同士でからかって言っているのを見ました。それを認知症の方や家族の方が聞けば、どう感じるでしょうか。

実際に経験しないと自分事として考える事はできにくいけれど、私は、みんなにもっと

認知症という病気の事を知ってほしいです。「認知症」という病気に対する誤解や偏見をなくし正しく理解する事で認知症の方の気持ちに寄り添った関わりができてくるのだと思います。また、その事が認知症の方にとっての安心につながりお互いに気持ちのよい関係が築けるのではないかと私は考えます。

これから、ますます認知症の患者が増えてくると言われています。それは、誰もが認知症の問題を抱える可能性があるという事です。だからこそ、認知症という病気を正しく理解する事が「令和」という新しい時代を迎えた今、必要になってきているのではないのでしょうか。